

# 共感性とストレス反応の関連

— 対人ストレスラーに注目して —

Relationship between empathy and stress responses  
— Focusing on interpersonal stressors —

関谷美希\*

Miki SEKIYA

**要約** 本研究では共感性とストレス反応の関連及び対人ストレスラーを介した際の影響について検討することを目的とした。

大学生を対象に質問紙を配布した結果、3尺度全てに正の相関が確認された。さらにストレス反応を基準変数、共感性と対人ストレスラーを説明変数として重回帰分析を行ったところ、どちらも有意な正の係数を示した。また対人ストレスラーを基準変数、共感性を説明変数として単回帰分析を行ったところ、有意な正の係数を示した。最後に、共感性からストレス反応への直接効果と対人ストレスラーを介した際の間接効果を測定するため、共分散構造分析を行ったところ全てのパス係数が有意となった。よって共感性の高さがストレス反応と対人ストレスラーに影響を与えるほか、対人ストレスラーを介してストレス反応に影響を与えることが明らかとなった。

**キーワード**：共感性、ストレス反応、対人ストレスラー

**Abstract** The purpose of this study was to investigate the relationship between empathy and stress responses and the effects of interpersonal stressors. A questionnaire was distributed to university students, and all three scales were correlated. Multiple regression analysis was performed using stress responses as a criterion variable and empathy and interpersonal stressors as explanatory variables. Results revealed significant positive coefficients for both variables. A single regression analysis was performed using interpersonal stressors as criterion variables and empathy as an explanatory variable. Results revealed a significant positive coefficient. Covariance structure analysis was performed to measure the direct effect of empathy on stress responses and the indirect effect of interpersonal stressors. All path coefficients were significant. Therefore, results revealed that empathy affects stress responses and interpersonal stressors and that it also affects stress responses via interpersonal stressors.

**Key words** : Empathy, Stress responses, Interpersonal stressors

## 1 問題

### 1-1 共感性

Davis (1980)によると、共感性とは他者の感情を共有したり理解したりするといった特性であり、認

知的側面と情動的側面の2つに大きく分けられる。認知的側面とは、「他者の立場に立ち物事を見ることで他者の心情を感じ取る、理解する」といった能力を強調する側面であり(Dymond, 1948)、情動的側面とは「他者が情動の状態を経験しているか、または経験しようとしている知覚したために、観察者にも生じる情動的反応」といった能力を強調する側面であると定義されている(Stotland, 1969)。後者は

---

\* 児童学専攻  
Department of Housing and Architecture

Mehrabian and Epstein (1972) によって「情動的共感性尺度」が作成されており、日本語版は加藤・高木 (1980) により作成されている。

情動的共感性、認知的共感性それぞれに様々な因子との関連性が検討されている中、近年は多次元の視点から共感性を捉えた研究が盛んに行われている。例えば、Davis (1980) により作成された対人反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index: 以下 IRI とする) は、他者の感情状態の共有や同情といった情動的側面と他者の心的状態の推測といった認知的側面から構成されており、共感性を単一概念ではなく複合的に測定することが可能である。IRI は全 28 項目で構成されており、「共感的関心 (Empathic Concern: 以下 EC とする)」、「視点取得 (Perspective Taking: 以下 PT とする)」、「個人的苦痛 (Personal Distress: 以下 PD とする)」、「想像性 (Fantasy Scale: 以下 FS とする)」の 4 つの因子から共感性を測定する。EC は情動的共感性における「不運な他者に対して同情や配慮などの他者指向的感情が喚起されること」であり、PT は認知的共感性における「他者の視点、立場を想像しその他者の気持ちを考えること」である。また PD は情動的共感性における「緊張した対人的状況下で他者の苦痛を観察することにより不安や動揺、恐怖などが自己に生じられること」であり、FS は認知的共感性における「本や映画といったフィクションの登場人物の気持ちを自分に置きかえ、自分が他者になったかのように想像すること」である。以上のように EC と PD が情動的共感性の側面を示し、PT と FS が認知的共感性の側面を示している (Davis, 1980)。

また、日本語版対人反応性指標が日道・小山内・後藤・藤田・河村・Davis・野村ら (2017) によって作成されており、特性不安や攻撃性、自尊感情との関連が検証されている。例えば、Spielberger, Gorsuch & Lushene (1970) が開発した状態-特性不安検査 (日本語版: 清水・今栄, 1981) によって不安傾向を状態・特性の面から測定したところ他者の苦痛が自己に生じられる PD と有意な正の相関が示されており、また、Buss & Perry (1992) が開発した他者への攻撃性を多面的に測定する攻撃性質問紙 (日本語版: 安藤他, 1999) では他者への同情や配慮を示す EC と負の相関が示されている。さらに Rosenberg (1965) が開発した自尊感情の程度を測定する自尊感情尺度 (日本語版: Mimura & Griffiths, 2007) では、他者の立場

から物事を考える PT と正の相関を示している。これは、PT の高さから良好な社会的関係を築きやすいために自尊感情が高められている可能性を Davis (1983) が提唱している。

このような多次元の共感性において、下田・黒山・吉村 (2011) はストレス反応との関連性を検討しており、周囲からの影響の受けやすさを表す被影響性や、悩んでいる他者のためを思う他者志向的反応といった共感性が高いほど抑うつ・不安などのストレス反応も高くなることを指摘している。以上のことから、多次元の共感性は情動的共感性と認知的共感性の二側面を同時に測定することが可能であり、ポジティブな影響力を持つと同時に精神的健康に対しネガティブな影響を及ぼすことも明らかになっていると言えよう。また下田・黒山ら (2011) は、ストレス反応が高くなる要因の一つとして、共感性における周囲からの影響の受けやすさがストレスを通常より高く評価することと関連している可能性があるためと推測しているが、共感性とストレスの関係はほとんど明らかにされていない。

## 1-2 対人ストレス

橋本 (2003) は対人関係が精神的健康に対し、ソーシャル・サポートなどによるポジティブな影響を及ぼす一方で、抑うつや不安、孤独感といったネガティブな影響を及ぼしている側面が大きいことを述べ、こうしたネガティブな対人関係の概念を「対人ストレス (interpersonal stress)」と定義している。橋本 (2005) はこの対人ストレスを、広義的には「対人関係に起因するストレス」であり実質的には「ストレスとなりうる対人的相互作用、およびそれによって生じるストレス」と述べており、また、位置づけとしてはソーシャル・サポートを「心身の健康に好影響を及ぼす対人関係の包括的概念」と定義付けた際の対概念とみなしている。

上記の定義を踏まえ、橋本 (2005) は多くの人が日常的に経験しうる様々な対人ストレスの包括的な測定を目的として、対人ストレス尺度を開発した。この尺度では、測定対象となる対人関係の適用範囲を特定の二者関係からネットワーク全般まで幅広く捉えることに留意し、現代における多様な対人関係を想定したストレス項目で構成されている。また対人ストレスを明確に表現するために、ストレス反応やストレスコーピングなどの観点から言

及される項目は避け、ストレスの受け手の感情やストレス状態の記述を極力含まない項目を目指したと述べられている。さらに橋本（2005）は、ストレスとなりうる対人的相互作用には自身が行為の主体となるような「～してしまった」という場合と、自身が行為の受け手となる「～された」という場合の両側面が含まれると考え、双方を偏りなく項目に加える点にも留意している。

以上の点に注意し対人ストレス尺度が作成され、下位尺度として「対人葛藤（interpersonal conflict）」、「対人摩擦（interpersonal friction）」、「対人過失（interpersonal blunder）」の3因子が抽出、命名された。「対人葛藤」因子は他者からのネガティブな態度や行動に関する項目群が高い負荷を示したとされ、主に自身が行為の受け手となる項目で構成されている。「対人過失」因子は、自身に非があって相手に迷惑や不快な思いをさせてしまうような項目群が高い負荷を示したとされ、主に自身が行為の主体となる項目で構成されている。そして「対人摩擦」因子には、自身がネガティブな心情や態度を明確に表出したり、されたりはしていないが、円滑な対人関係を維持するためにあえて意に添わない行動をしたり、相手に対する期待はずれを黙認するような項目群が高い負荷を示したとされる。そして橋本（2005）は、特定の対人関係として男性同性知人、女性同性知人、異性友人、恋人、母親、バイト先の苦手な知人、学内の苦手な知人をそれぞれ想定したうえで対人ストレスとストレス反応との相関を検討している。用いられたストレス反応尺度は鈴木・片柳・嶋田・右馬埜・三浦・坂野（1997）による Stress Response Scale-18（以下 SRS-18 とする）であり、「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の3因子からなる。対人葛藤は、学内の苦手な知人においてすべてのストレス反応指標と有意な正の相関を示しており、対人過失においては、女性同性知人と異性友人においてのみ、「抑うつ・不安」および「無気力」と有意な正の相関を示した。そして対人摩擦については、女性同性知人、異性友人、そして学内苦手知人で「無気力」と有意な正の相関を示し、学内苦手知人ではさらに「抑うつ・不安」とも有意な正の相関を示した。これらの結果から、対人ストレスが高まるほどストレス反応が高まることと示唆されているといえよう。

### 1-3 ストレス反応

鈴木・片柳ら（1997）は、心理的ストレス反応を「日常体験するさまざまなストレスによって引き起こされる情動的、認知的、行動的变化」であると定義し、SRS-18を作成した。ストレス反応を測定する尺度には、例えば抑うつ症状の程度を判定するためのバック抑うつ質問票（BDI）や、Spill Burgerによって不安を測定するために作成された状態-特性不安検査（STAI）などが存在し、また一側面ではなく包括的、多角的にストレス反応を測定する尺度として Goldburg による GHQ や Derogatis による HSCL などが作成されている。これらを踏まえ SRS-18 は、個人が日常的に経験する心理的ストレス反応を一側面からではなく多方面から評価し、かつ回答者の負担にならない項目数と幅広い年齢層が測定対象となることを目的として開発されている。なお、因子分析の結果は先述のとおり3因子に分かれており、「泣きたい気持ちだ」「気持ちが沈んでいる」などの抑うつ・不安因子、「いらいらする」などの不機嫌・怒り因子、そして「話や行動がまとまらない」「何かに集中できない」などの無気力因子から構成される。

また、豊田・照田（2013）は SRS-18 を用いてストレス反応とストレスの関連を検討しており、前述のとおり対人ストレスとストレス反応には相関があることを明らかにしている。

## 2 目的

以上の点を踏まえ、本研究では共感性、対人ストレス、ストレス反応の関連を検討する。共感性とストレス反応に正の相関が見られ、対人ストレスとストレス反応にも正の相関があることが明らかにされている一方、共感性と対人ストレスの関連はほとんど検討されていない。しかし、共感性がストレス反応に影響を及ぼしている場合、対人ストレスを介している可能性が考えられる。したがって、共感性とストレス反応の関連性及び対人ストレスを介した際の影響について検討することを目的とし、以下の仮説を立てた。

**仮説 1：共感性が高いほどストレス反応は高くなる**

日道・小山内ら（2017）や下田・黒山ら（2011）の研究により、共感性と抑うつ・不安などのストレス反応には正の相関があることが示されている。本

研究でも、他者の苦痛が自己に生じたり、自分が他者になったかのように想像するといった共感性の特徴によって精神的健康に影響が生じると予測する。特に日本語版対人反応性指標における EC・PD は他者のネガティブな感情が自己に喚起されてしまう因子のため、ストレス反応が高くなると考えられる。そのため、共感性の高さとストレス反応には正の相関があると考え、本仮説を検証する。

### 仮説 2：対人ストレスが高いほどストレス反応は高くなる

橋本 (2005)、豊田・照田 (2013) の研究の通り、対人ストレスとストレス反応には正の相関が確認されている。本研究でも、対人ストレス尺度のうち、他者からのネガティブな態度や行動を受ける対人葛藤や円滑な人間関係のために自身の主張を抑えるといった対人摩擦が心労となり、ストレス反応に影響を及ぼしていると仮定する。また、他者に迷惑をかけてしまうといった対人過失は自身を責めたり追い詰めたりするようなネガティブな感情と結びつく可能性があり、抑うつや無気力といったストレス反応に影響すると仮定し、対人ストレスとストレス反応には正の相関が見られると予測する。

### 仮説 3：共感性が高いほど対人ストレスの対人摩擦は高まり、対人葛藤は低くなる

日本語版対人反応性指標のうち、PT や FS は他者の気持ちや立場を想像する因子であるため、対人関係において相手の気持ちや場の空気を察することで自己主張を避けたり気を遣ったりする可能性がある。また、EC も同様に他者を気かけたり気遣ったりといった項目で構成されている。つまり、上記の共感性が対人ストレスの対人摩擦因子と正の相関を示すと予測する。ただしこれらの要因に加えて、日道・小山内ら (2013) や加藤・高木 (1980) の研究により反抗・内的混乱因子や攻撃性と負の相関が示されていること、Davis (1983) が共感性の高さが良好な社会的関係を築きやすさに繋がることを提唱していることなどから、直接的な対人関係のトラブルは起きにくいと考えられる。よって、対人ストレス尺度のうち他者からネガティブな行為を受ける対人葛藤因子は高くなると推測し、本仮説を検証する。

### 仮説 4：共感性は対人ストレスを媒介してストレス反応に影響を与える

仮説 1～3 に基づき、共感性が対人ストレスにもストレス反応にも影響を及ぼし、また対人ストレスがストレス反応に影響を及ぼしている場合、共感性とストレス反応の関連には対人ストレスが媒介要因として存在している可能性がある。そのため、共感性からストレス反応への直接効果と対人ストレスを媒介した際の間接効果が見られると仮定し、仮説を検討する。

## 3 方法

目的に沿って、大学生を対象に共感性とストレスに関する質問紙調査を行った。以下に調査対象者、調査手続き、質問紙の構成を説明する。

### 3-1 調査対象者

日本女子大学の学生 1 年～4 年計 198 名であった。全回答者 198 名のうち、明らかな虚偽回答を含むと判断された回答者や、調査項目の 3 分の 1 以上に回答していない回答者を除いた。最終的に、180 名が有効回答者となった。

### 3-2 調査手続き

個別自記入形式の質問紙調査で実施された。調査時期は 2018 年 10 月 5 日～10 月 31 日であった。授業後に筆者によって集合調査形式で実施され、また校内で在校生を通して個別配布個別回収形式で実施された。回答依頼時に、文章と口頭で説明合意を得ており、お菓子を謝礼として提示した。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約 5 分程度であった。

### 3-3 質問紙の構成

#### 1 共感性の測定

日本語版対人反応性指標 (日道・小山内他, 2017) を使用した。Davis (1980) が開発した共感性の特性を複合的に測定する尺度である IRI を、日道ら (2017) が再翻訳法によって日本語化したものである。「共感的関心 (EC)」、「視点取得 (PT)」、「個人的苦痛 (PD)」、「想像性 (FS)」の 4 つの側面から測定しており、調査会社 (株式会社マクロミル) に登録している 20 歳から 59 歳のモニター 416 名に同尺度を実施した結果、信頼性係数は十分な値を示したことが確認され

ている。ただし、日道・小山内ら（2017）によると PT の  $\alpha$  係数は尺度内の他の項目と相関関係の低かった 2 項目を除外した際に十分な値 ( $\alpha=.75$ ) を示しており、これら 2 項目を含めなくとも確認的因子分析や相関分析の結果に大きな違いはなかったことが確認されている。よって、本研究でも PT の 2 項目は除外したため質問項目は計 26 項目となった。また、内容的妥当性、構成概念妥当性にも大きな問題がないことが確認されている。それぞれについて「全く当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「非常によく当てはまる」の 5 件法で回答する形式である。項目内容は表 1 に示す。

## 2 対人ストレスの測定

対人ストレス尺度（橋本, 2005）を使用した。橋本（2005）により、先行研究における対人ストレス尺度項目や対人ストレスとなりうる出来事のリスト、また自由記述に基づき作成された、さまざまな対人関係において適用可能となる新たな対人ストレス尺度である。「対人葛藤」「対人過失」「対人摩擦」の下位尺度から成り、十分な信頼性、妥当性を有している。計 18 項目の質問で構成されている。それぞれについて「全くなかった」「ほとんどなかった」「ときどきあった」「しばしばあった」の 4 件法で回答を求めた。項目内容は表 2 に示す。

Table 1 Items on the IRI scale

- 
1. 自分の身に起こりそうなことについて、空想にふけることが多い
  2. 自分より不運な人たちを心配し、気にかけることが多い
  3. 他の人たちが困っているのを見て、気の毒に思わないことがある
  4. 小説に登場する人物の気持ちに深く入り込んでしまう
  5. 非常事態では、不安で落ち着かなくなる
  6. 映画や劇を見るときはたいいてい、引き込まれてしまうことはなく客観的である
  7. 何かを決める前には、自分と意見が異なる立場のすべてに目を向けるようにしている
  8. 誰かがいいように利用されているのを見ると、その人を守ってあげたいような気持になる
  9. 激しく感情的になっている場面では、何をしたらいいかわからなくなることがある
  10. 友達のことをよく知ろうとして、その人からどのように物事が見えているか想像する
  11. よい本や映画にすっかり入り込んでしまうことはめったにない
  12. 誰かが傷つけられるのを見たとき、落ち着いていられる方だ
  13. 他の人が不運な目にあっているのはたいいてい、それほど気にならない
  14. 演劇や映画を見た後は、自分が登場人物のひとりになりきっている感じがする
  15. 気持ちが張り詰めた状況にいと、恐ろしくなってしまう
  16. 誰かが不公平な扱いをされているのを見たときに、そんなにかわいそうだと思わないことがある
  17. 緊急事態には、たいいていはうまく対処できる
  18. 自分が見聞きした出来事に、心を強く動かされることが多い
  19. すべての問題点には 2 つの立場があると思っており、その両者に目を向けるようにしている
  20. 自分は思いやりの気持ちが強い人だと思う
  21. よい映画を見るとき、自分を物語の中心人物に置き換えることが簡単にできる
  22. 切迫した状態では、自分をコントロールできなくなる方だ
  23. 誰かにいらいらしているときにはたいいてい、しばらくその人の身になって考えるようにしている
  24. 面白い物語や小説を読んでいると、その話の出来事がもし自分の身に起こったらどんな気持ちになるだろうかと
  25. 差し迫った助けが必要な人を見ると、混乱してどうしたらいいかわからなくなる
  26. 誰かを批判する前には、自分が批判される相手の立場だったらどう感じるか想像しようとする
- 

EC(2,8,18,20,3\*,13\*,16\*) PT(7,10,19,23,26) PD(5,9,15,22,25,12\*,17\*) FS(1,4,14,21,24,6\*,11\*)

\*逆転項目

Table 2 Items on the Interpersonal stressors scale

1. あなたの落ち度を相手にきちんと謝罪・フォローできなかった
2. 相手に対して果たすべき責任を、あなたが十分に果たせなかった
3. あなたの意見を相手が真剣に聞こうとしなかった
4. あなたのミスで相手に迷惑や心配をかけた
5. 相手からけなされたり、軽蔑された
6. あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないよう気を使った
7. 相手にとって余計なお世話かもしれないことをしてしまった
8. 相手から、あなたと関わりたくなさそうな態度やふるまいをされた
9. 相手に過度に頼ってしまった
10. 相手が都合の良いようにあなたを利用した
11. その場を抑えるために、本心を抑えて相手を立てた
12. 相手に合わせるべきか、あなたの意見を主張すべきか迷った
13. 相手からあなたを信用していないような発言や態度をされた
14. 相手の仕事や勉強、余暇の邪魔をしてしまった
15. 相手の機嫌を損ねないように、会話や態度に気を使った
16. 本当は指摘したい相手の問題点や欠点に目をつむった
17. 相手の問題や欠点を注意・忠告したら逆に怒られた
18. 本当は伝えたいあなたの悩みやお願いを、あえて口にできなかった

対人葛藤(3,5,8,10,13,17) 対人過失(1,2,4,7,9,14) 対人摩擦(6,11,12,15,16,18)

### 3 ストレス反応の測定

Stress Response Scale-18 (鈴木他, 1997) を使用した。心理的ストレス反応を測定する尺度である。鈴木ら (1997) は、大学生 72 名を対象としてストレスを感じた際に示す気分、感情、心理的变化に関する自由記述調査を行い、心理的ストレス反応に関する項目を収集した。さらに高校生、大学生、成人を対象とした本調査を行い、計 18 項目の質問からなる尺度が作成された。下位尺度は「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」であり、信頼性、妥当性ともに十分な結果が示されている。それぞれについて「全く違う」「いくらかそうだ」「まあそうだ」「その通りだ」の 4 件法で回答を求めた。項目内容は表 3 に示す。

## 4 結果

### 4-1 信頼性の検討

日本語版対人反応性指標、対人ストレス尺、SRS-18 における各因子の信頼性を確認するため、クロンバックの  $\alpha$  係数を算出した。日本語版対人反応性指標のうち、EC は  $\alpha = .84$ , PT は  $\alpha = .82$ , PD は  $\alpha$

$= .77$ , FS は  $\alpha = .86$  となり、いずれも高い信頼性を示した。また、対人ストレス尺において、対人葛藤は  $\alpha = .78$ , 対人過失は  $\alpha = .71$ , 対人摩擦は  $\alpha = .75$  となりいずれも高い信頼性を示した。SRS-18 では、抑うつ・不安は  $\alpha = .87$ , 不機嫌・怒りは  $\alpha = .85$ , 無気力は  $\alpha = .83$  となりいずれも高い信頼性を示した。

### 4-2 共感性、対人ストレス尺、ストレス反応の関連の検討

各尺度間の関連を検討するため、日本語版対人反応性指標、対人ストレス尺、SRS-18 の相関係数を尺度ごと、因子ごとにそれぞれ算出したところ、以下の結果が得られた。

まず、尺度ごとの相関では、日本語版対人反応性指標と SRS-18 では有意水準 1% で高い正の相関が示され、対人ストレス尺と SRS-18 でも有意水準 1% で正の相関が認められた。また日本語版対人反応性指標と対人ストレス尺でも有意水準 1% で正の相関が認められた。続いて因子間では、日本語版対人反応性指標と SRS-18 では全ての因子と有意水準 1%

**Table 3** Items on the SRS-18

1. 怒りっぽくなる
2. 悲しい気分だ
3. なんとなく心配だ
4. 怒りを感じる
5. 泣きたい気持ちだ
6. 感情を抑えられない
7. 悔しいおもいがする
8. 不愉快だ
9. 気持ちが沈んでいる
10. いらいらする
11. いろいろなことに自信がない
12. 何もかもいやだと思う
13. よくないことを考える
14. 話や行動がまとまらない
15. なぐさめてほしい
16. 根気がない
17. 1人でいたい気分だ
18. 何かに集中できない

抑うつ・不安(2,3,5,9,12,15) 不機嫌・怒り(1,4,6,7,8,10)

無気力(11,13,14,16,17,18)

で有意な正の相関を示した。また、日本語版対人反応性指標と対人ストレッサーでは、対人過失、対人摩擦と有意水準 1%で有意な正の相関を示した。対人葛藤とは、EC,PT,FS が有意水準 1%で負の相関を示し、PD は有意水準 5%で負の相関を示した。そして、対人ストレッサー尺度と SRS-18 では、対人過失、対人摩擦と抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力が有意水準 5%で正の相関を示した。対人葛藤とは、SRS-18 の全ての因子と有意な相関を示さなかった。

#### 4-3 共感性と対人ストレッサーがストレス反応に及ぼす影響の検討

ストレス反応に及ぼされている影響を検討するため、SRS-18 を基準変数とし、日本語版対人反応性指標と対人ストレッサー尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。解析は一括投入法によるものであり、得られた結果を以下に示す。解析の結果から標準偏回帰係数の有意性を見ると、日本語版対人反応性指

標と対人ストレッサー共に 0.1%水準で有意な正の係数を示した。

また、共感性が対人ストレッサーに及ぼす影響も検討するために対人ストレッサー尺度を基準変数とし、日本語版対人反応性指標を説明変数として単回帰分析を行った。表 7 に示す結果が得られた。標準偏回帰係数の有意性をみると、0.1%水準で有意な正の係数を示した。

#### 4-4 直接効果と間接効果の検討

共感性がストレス反応に影響を及ぼしている際に、対人ストレッサーを媒介している可能性を検討するために、パス解析を行った。解析に用いた変数は対人反応性指標、対人ストレッサー尺度、SRS-18 であり、それぞれ変数名を共感性、対人、反応とした。共感性と対人ストレッサーがストレス反応に影響を与え、また共感性が対人ストレッサーに影響を与えていることに基づきパス図を作成し、共分散構造分析によって得られた結果を以下に示す。

まず、CFI,GFI は共に 1.0 を示し、十分な値であることが確認された。また、共感性から対人、共感性から反応、対人から反応の全てのパスが 0.1%水準で有意であった。尚、標準化推定値は共感性から対人が.57、共感性から反応が.49、対人から反応が.4 であった。共感性から反応への直接効果は.49 であり、対人を媒介した際の直接効果は.23 であった。

## 5 考察

### 5-1 仮説 1 について

日本語版対人反応性指標と SRS-18 の相関係数を算出した結果、全ての因子と正の相関が見られ、共感性が高いほどストレス反応が高くなることが示唆された。特に、抑うつ・不安との相関は下田・黒山ら (2005) の研究を支持する結果となり、特性不安との相関を明らかにした日道・小山内ら (2017) の研究もまた支持する結果となった。したがって、共感性が高いほどストレス反応は高くなるという仮説は支持された。この結果は、目的で述べたように他者の立場や感情を想像したり自己に置き換えたりする共感性の特徴が、他者の苦痛やネガティブな感情に関しても起こり得るため、ストレス反応と結びついた結果と考えられる。

## 5-2 仮説2について

対人ストレス尺度と SRS-18 の相関係数を算出した結果、「対人葛藤」以外の因子と SRS-18 における全ての因子が正の相関を示した。このことから、対人ストレスの「対人摩擦」「対人過失」が高いほどストレス反応も高くなることが示唆された。よって、対人葛藤が高いほどストレス反応が高くなるという部分を除き、対人ストレスが高いほどストレス反応は高くなるという仮説が一部支持される結果となった。

この結果は、橋本（2005）や豊田・照田（2013）によって明らかにされている通り、対人ストレスとストレス反応の関連性を示すものであるが、「対人葛藤」との関連性が見られなかったことに関して以下の様に考察する。橋本（2005）の研究において、「対人葛藤」とストレス反応は指定した特定の対人関係のうち、学内の苦手な知人の場合のみ正の相関を示していた。本研究では対人ストレスに特定の関係性を指定しなかったため、回答者によって、また回答する項目によって想定される人物が様々であったと考えられる。つまり、学内の苦手な知人以外の人物を想定して「対人葛藤」に回答した場合、ストレス反応とは相関が示されない可能性がある。したがって橋本（2005）の研究とは異なる結果が示されたと考察する。

## 5-3 仮説3について

日本語版対人反応性指標と対人ストレス尺度の相関係数を算出した結果、「対人摩擦」「対人過失」は全ての因子と正の相関を示し、「対人葛藤」は負の相関を示した。このことから、共感性が高いほど対人ストレスの対人摩擦は高まり、対人葛藤は低くなるという仮説は支持された。

この結果から、目的で述べたように他者の気持ちや立場を想像したり思いやったりといったポジティブな共感性の特徴が、対人関係においては過剰に相手の気持ちを気にしたり場の空気を察して気を配ることに繋がり、言いたいことを我慢したり相手の落ち度に目を瞑ったりといった「対人摩擦」に結びついている可能性が考察される。また、「対人葛藤」と負の相関を示したことについても、目的で述べた通り上記の共感性の特徴が良好な社会的関係の築きやすさに繋がり、直接的に態度や行動でネガティブな行為を示されることは少ないためと考えられる。さら

に「対人過失」と正の相関を示したことについては、先述した過剰に気を配ったり他者の気持ちを気にしたりといった傾向が自身の過失に関しても高く評定することに繋がる可能性や、PD における「非常事態では不安で落ち着かなくなる」「切迫した状況では自分をコントロールできなくなる」といった項目が過失に繋がっている可能性が考察された。

## 5-4 仮説4について

重回帰分析と単回帰分析の結果、ストレス反応の higher は共感性、対人ストレスが高く、また対人ストレスが高い者は共感性が高いことが示唆された。さらに共分散構造分析によって、共感性からストレス反応、対人ストレスからストレス反応、そして共感性から対人ストレスへのパスが有意となり、共感性からストレス反応への直接効果と対人ストレスを媒介した際の間接効果が示唆された。またパス係数により、間接効果より直接効果の方が大きいことが明らかとなった。したがって、共感性は対人ストレスを媒介してストレス反応に影響を与えるという仮説は支持されたが、対人ストレスを媒介しない効果の方が大きいという結果になった。これは、正の相関が認められた3尺度の中でも共感性とストレス反応が特に高い相関を示していたことが関係していると推測される。

## 5-5 結論

本研究での目的は、「共感性がストレス反応に影響を及ぼしている場合、対人ストレスを媒介している可能性がある」という仮説を検証することであった。本研究では、日道・小山内ら（2017）、下田・黒山ら（2011）の研究で確認されていた様に共感性とストレス反応には正の相関があり、橋本（2005）や豊田・照田（2013）が明らかにした通り対人ストレスとストレス反応にも正の相関があることが確認された。そして、共感性と対人ストレスに正の相関が認められ、間接効果の影響が確認された。但し、直接効果の影響がより大きく、対人ストレスにおける一部の因子は正の相関を示さなかった。

したがって、全体的に見れば、共感性がストレス反応に影響を及ぼす際には対人ストレスを媒介している場合としていない場合があると結論され、仮説は支持されたと考えられる。

## 5-6 本研究の問題点と今後の課題

本研究における問題点は以下の通りである。

まず、対人ストレッサーにおける「対人葛藤」がストレス反応と相関を示さなかった点について、先述した通り特定の対人関係を指定しなかったことが影響している可能性がある。よって、橋本（2005）が示すように特定の対人関係ごとに対人ストレッサーを測定し、共感性、ストレス反応との関連性を検討する必要がある。

また、本研究は女子大学生のみを対象としたデータに留まっており、男女差は比較することが出来なかった。また、大学生になると高校までよりも多方面にわたる出会い、繋がりが増えやすいと考え大学生の対人ストレッサーを測定したが、社会人や中高生で結果に違いがみられるか、また大学生のうち学年によって差が見られるかなども検討する必要がある。したがって、今後はより多くのサンプルを用いてデータを収集する必要性があろう。

## 6 参考文献

- ・ Davis M. H (1980) A multidimensional approach to individual differences in empathy. Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology 10-85
- ・ Feshbach, N (1969) Sex differences in children's modes of aggressive responses toward outsiders. Merill palmer Quarterly, 15 249:258
- ・ 橋本（2003）対人ストレスの定義と種類：レビューと仮説生成的研究による再検討 人文論集 54(1), A21-A57
- ・ 橋本（2005）対人ストレッサー尺度の開発 人文論集 56(1): A45-A71
- ・ 日道・小山内・後藤・藤田・河村・Davis・野村（2017）心理学研究 88(1), 61-71
- ・ 加藤・高木（1980）青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究(2) 33-42
- ・ Mehrabian, A & Epstein, N (1972) A measure of emotionalempaty. Journalof Personality, 40, 525-543
- ・ 大西・西田（2010）いじめの個人内生起メカニズム -集団規範の影響に着目して- 験社会心理学研究 49(2), 111-121
- ・ 下田芳幸 黒山 竜太 吉村 隆之（2011）共感性が対人ストレスコーピングおよびストレス反応の表出に及ぼす影響 富山大学人間発達科学部紀要 6(1), 171-180
- ・ Stotland, E (1969) Exploratory investigations of empathy Vol.4. New York Academic Press. 271-314
- ・ 鈴木・片柳・嶋田・右馬埜・三浦・坂野（1997）新しい心理的ストレス反応尺度（SRS-18）の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究 4(1), 22-29

